

# 日本語中級教科書について

佐藤 豊

## 1. はじめに

ICUの日本語教育課程（Japanese Language Programs, JLP）においては、現在、当プログラムにおいて使用する日本語中級教科書像を模索中である（その経過については佐藤1999参照）。本報告書においては、中級の教科書像および開発手順を探るべく、関連の論文・報告書を検討してみた。以下に、その結果を報告する。

## 2. 中級の教科書に求められているもの

従来より「初級は話しことば、中級は書きことば」という日本語中級教科書観が一般的であった。たとえば、大木（1994）は中級教科書を初級・上級の教科書と比べて次のように述べている。

初級とは日常レベルの日本語と要約できる。これに対して中級レベルは書き言葉のための読み書き中心の日本語ということになる。（大木，1994，p.49）

中級から上級への区分は専門分野などの事柄が生の教材を使って習得できるまでに基礎能力を身につけているかどうかにかかっているといえる。「生」の教材を使って習得できるということは、専門分野の講義や原書がある程度まで理解できる段階に達しているということであ[る]...（大木，1994，p.50）

大木は、中級レベルを語彙能力の違いにより「中級前期」「中級後期」（p.51）の2期にわけている。そして、文章読解の単位を小さい単位から大きい単位へ（表記→語句→文単位→段落・文間→文章・段落間）の連続の中でとらえ、レベルの上昇によりその単位が大きなものになるという分析的アプローチをしている。

ここでは中級教材の中心として扱われている長文読解の例をあげる。どの読解授業でも順序に多少の差はあっても例えば最初に本文の内容について学習者のレベルにあった言葉を使って話し合いをするなどの予備段階を経て、本文ととり組むが、読み方練習から語彙・語句レベルへ、そして文レベルの理解と練習、更に段落・文章レベルの理解と要約などへと授業が進められるのが普通である。...つまり中級前期では語彙・語句・文レベルの基礎的な学習ポイントがあり、中級後期では実際に近い文章レベル

の内容事柄の理解のためへの学習へとポイントが移るわけである。(大木, 1994, p.51)

羽田野(1990, p.13)も、「[中級]という段階の定義、また「中級」で教えるべき教育内容の範囲についてはまだ確定されているとはいえないが、通常、初級段階では「話し言葉」が、中級段階では「書き言葉」が中心となる傾向にある。」と述べている。木村(1966)は、「中級教材盛り込むべき素材」として実生活に必要な語彙もあげつつも、中級教材の内容ということになると、「読本」中心のものが通常であると述べている。

○中級教材に盛り込むべき素材：

1. 初級で扱われない文法事項と文型。
2. 学習者のための基本語彙から、さらに進んで、一般的言語生活に必要とする語彙、すなわち、実生活での使用頻度を重視して選んだことば。
3. すでに学んだ基本的なことばの多義的な意味と用法および慣用的語句と慣用的表現。
4. 物語、解説、講演など、聴力養成に役立つ材料。
5. 文字言語の読解に慣れさせるための、「である」体の材料。
6. 新出漢字... (木村, 1966, p. 83)

○中級教材はふつうつぎのようなもので構成されている。

1. 読本。
2. 単語表—新出語の読み方と訳語を示す。
3. 漢字表—新出漢字の音訓、筆順、熟語などを示す。
4. 練習帳—新出語の同意語、反意語、対照語、語句の用法、漢字の読み書き、文の理解、表現などの練習を与える。
5. 読本を読んだ録音テープなど。 (木村, 1966, pp. 83-84)

以上のように、従来より日本語の中級教科書というものは読解教材を中心にできたものであった。このような教科書像というものは、日本の大学あるいは大学院において専門分野を学び学位を取るといった留学生のニーズが基になってできたものだと考えられる。

しかし、日本の大学で日本語を学習する者が全て専門分野での学位取得を目指しているわけではない。たとえば、AKP (the Associated Kyoto Program, Doshisha University) や関西外国語大学留学生別科では、1年間主に北米からの留学生を受け入れ日本語や日本の文化や歴史を英語で勉強するというプログラムを提供している。そして、これらのプロ

グラムにおいては、学位取得のためではなく、日本文化を体験し、日本学・アジア学の知識を深め、日本語の能力も上達させることを目標とする学生たちが参加している。その結果、対象となる学生には以下のようなニーズがあると捉えられており、上記とは異なった中級教科書が求められている。

AKP : 大野・大野, 1993, p. 83

教科書を選択する際に基準とした二番目の点は、我々の学生のニーズは何かということである。アメリカのliberal artsの大学で学ぶ彼らのニーズは、当然、技術研修者として日本語を学ぶ者などのニーズとは違い、一つの専門分野に対処するための日本語を身につけることではない。彼らは一般的な日本語能力の向上を目指していると考えられるが、その「一般的な日本語の能力」とは、もっと具体的に言うと、「彼らと同年代の日本人の大学生が話題にするようなことが理解でき、それに対して自分の考えや意見が適切に表現できる日本語の能力」と解釈できる。我々の春学期の授業の目標が、単なる日常会話に必要な日本語を越えて、いわゆる教養人として知的な内容の会話に参加できる日本語を養うことであるならば、それに適した教科書を選ぶ必要がある。

関西外国語大学留学生別科 : 小山ほか, 1997

中・上級の市販の教科書は、会話中心のものが少ないこともあり、本学では、独自の日本語中級後期の会話クラス(JPN202)用教科書を作成、使用してきた。p. 37

初級の教科書はどれも話しことば中心だが、中級の教科書は学習対象が書き言葉に移り、長文の読解を中心に、文型、語彙を学習する形態をとるものが主体になる。つまり、中級でも話しことばだけを学習対象にしている教科書をさがすのはむずかしい。

p. 38

まず、中級後期レベルの方向づけを次ぎのように規定した。基本文型は終了しその運用能力もかなりの程度あるが、生教材を使って専門的な研究をしたり、その結果を発表したりする上級レベルの能力にはまだ達していない。そのレベルにつなげるために、実生活に即した状況の中からより基本的なトピックをできるだけ多く取り上げ、広い分野の語彙能力を向上させ、生教材前の基礎体力を蓄える。話しことばも個人対個人の会話から多数を相手にしたあいさつ、ディスカッション、口頭発表へとその中心を移行させる。p. 38

ICUの留学生の多くは、4年本科生ではなく1年本科生であることから、専門分野における学位取得を目指すよりは、AKPや関西外国語大学と同じようなニーズ持つ学生であ

ると考えられる。つまり、「書き言葉」のみならず「話し言葉」を教えることが、中級レベルでも必要だと考えられる。しかし、特に中級レベルにおいて読解教材の必要性は否定できないものであるので、次節では読解教材の作成における留意点に触れ、第4節においてはそのような読解教材に「話し言葉」の要素を含ませる方法を紹介する。

### 3. 読解教材の作成

第2節に述べたような読解中心の典型的な教科書作成の手順は以下のようになるであろう。

教科書作成過程：羽田野，1990，p. 20

- (1) 話題・本文に盛り込むべき内容の決定
- (2) (1)に基づき本文を書き下ろす。
- (3) 本文確定後、学習項目を抽出し、決定する。
- (4) 学習項目に用例を付ける。
- (5) 練習などの補助教材を作成する。

レベルや目的によっては、「書き下ろし」だけではなく、「書きなおし」「易しいもの」あるいはレベルにあった生教材（大木，1994，p. 56；築島ほか，1993，p. 10）を取り込んでいくことになる。

そこで最も重点が置かれるのが、トピックの選定だと言われている。河原崎（1979）は、10種の中級教科書の内容の割合を出して分析しており、羽田野（1990）は、トピックの選定についての学生からのフィードバックを報告している。宮原（1997，pp. 96-98）には、よい読解教材を選ぶ時の条件が挙げられており、参考することができる。その箇条書きを下に示す。

よりよい教材のためのいくつかの条件：宮原，1997，pp. 96-98

- (1) 技術的な側面
  - ① 内容が具体的に述べられているか。
  - ② 長さが適当であるか。
  - ③ 具体的な事実から一般的な結論への展開に節度があり、内容について議論する余地がのこされているか。
- (2) 内容的な側面
  - ① 教材の内容に社会的な広がりを感じられるか。

- ② 内容に国際性があるか。
- ③ 内容が学生にとって身近なものであるか。
- ④ 内容に話題性があるか。
- ⑤ 学生の立場から見て、内容に意外性ないし驚きがあるか。
- ⑥ 学生の共感が期待できるか。
- ⑦ 教師自身が関心のあるテーマであるか（また、それは教師の価値観とどうかかわっているか）。

以上のように、読解教材のシラバスのタイプは、「内容シラバス」の下位分類「話題シラバス」に基づいているものといえ、言語的な文法事項・意味／概念・機能などにもとづいてできたシラバスとは異なる（フォード, 1996, p. 72 ; 田中・斎藤）。そのために、言語的なものは、選ばれた教材の中から抽出されて出来る「事後的」なシラバスに現れるものとなる。フォード（1996, p.71）は、野田（1986）における教科書別の文型構成の分類を次のようにまとめているが、「その後、新しい中級教科書が何冊か出版されているが、文型に対する考え方によって分類すると、すべてIIの「いきあたりばったり派」に属するものである」と結論している。

フォード（1996, 71）にある野田（1986）のまとめ：

- I. あなたまかせ派：読解用の本文があるだけで、文型を取り出したり、その練習をつけたりしていない教科書。たとえば早稲田大学の『外国学生用日本語教科書中級』
- II. いきあたりばったり派：読解および会話用の本文があり、その本文に出てきた文型をとりあげ、用例を示したり、練習をつけたりしている教科書。文型の提出にあたって体系だったものがあるわけではなく、たまたま本文に出てきたものを拾っている。たとえばアメリカ・カナダ十一大学連合日本語研究センターの *Integrated Spoken Japanese* がある。
- III. 初級なぞり派：文型を中心に積み上げていく、初級教科書と同様の構成になっている。たとえば、大阪外国語大学の *Intermediate Japanese* がある。
- IV. くみなおし派：初級教科書の文型の分け方や提出順序とは全く別の視点で、文型をくみなおした文型中心の教科書。『表現文型』がある。

同様な点が築島ほか（1993, pp. 6-7）にも取りあげられている。

読解教科書の文型練習は、本文に出てきたものを抽出して作成することが、一般的な

手順であると思われる。つまり、本文選び／作成→練習問題作成、という流れがある。これには、自然な文脈のなかで現れた文型が抽出できるという利点はあるが、たまたまその本文に現れたものが抽出されて練習問題になってしまっているということでもある。無数にある日本語の表現や語彙を、中級学習者にどうやって与えていくかということは、非常に難しい問題である。中級文型というものが未整理な現状では、教師が試行錯誤しながら教材作成にあたるしかないのかもしれない。しかし、既刊の読解教科書における練習問題の文型や表現が特定の本文に現れた特定のものであり、客観的な基準によって選ばれているとは言いにくい...

そのためか、築島ほか（1993, p. 10）により、中級教科書に出ている文型の共通性は低いものだと報告されている。

...練習問題の文型抽出の際には、未だ指標となる調査研究が少ないために、教師の個人的な経験に頼らざるを得ないというのが現状である。実際、2章で調査した35冊において、何らかの練習をさせている文型の練習の異なり数は244、学会資料で取り上げられた文型は260にも及ぶ。そのうち、複数の教科書に共通して現れている文型は大変少ない。

同様に、文型タイプ別の割合において、教科書によって片寄りがあることが、川口（1986, p. 17）によって指摘されている。

なお、河原崎（1979）は、中級教科書練習帳にある練習問題をまとめており（p. 59）、また中級教科書の各課別漢字・語彙数も分析している（p. 62）。

#### 4. 「書きことば」教材と「話しことば」教材の折衷

小山ほか（1997, pp. 40-41）は、特に会話を取り入れた中級教科書という視点から最近の教科書を分析し、ABCの3種類に分類している。

- A. 従来型教科書：場面やトピックを中心に会話があり、置き換えや言い替え等の文型練習を中心に練習問題が作成されたものである。...練習はすべてクラス内の学習者同士で行うように作られている。
- B. 従来型とコミュニケーション重視型の折衷型：話すことに重点をおいてあり、Aにおける置き換え等の練習に加えて、トピックや会話に関する質問に関する質問に答える形式のものや、クラス内で学生同士お互いに質問し合ったり、クラス内

で、話し合ったりさせるものや、文型や文法をつかったコミュニケーションをさせたり、従来の文法や表現能力とコミュニケーション能力の両方を発達させることを目的としている。これらのタスクも、クラス内の学習者同士で練習させるよう作られているものが多い。

- C. 個別のアクティビティ活動を支援するための教科書：3つめは、コミュニケーション活動を支援するために、個別のアクティビティ（例えば、インタビュー、ロールプレイ、プロジェクトワーク、ディスカッション、論文作成等）ができるように導いてくれる、学習者の自己啓発や学習動機を増大させることを目的としているものである。

以上のA-Cの3分類にわけられている教科書は以下の通りである。

A. 従来型

日本語表現文型中級. 1983.

自然な日本語. 1984.

技術者研修のための日本語. 1986.

*Standard Japanese* [英文標準日本語]. 1987.

*Current Japanese*. 1987.

日本語でビジネス会話—中級編—. 1987.

総合日本語中級. 1987.

日本語会話中級教科書1, リーとクラークの冒険. 1988.

*Business Japanese II*. 1988.

*Spoken Japanese*. 1990.

中級日本語I. 1990.

現代日本語コース中級II. 1990.

*Advanced Japanese*. 1990.

*Talking Business in Japanese*. 1991.

実用ビジネス日本語. 1993.

B. 新しいタイプの教科書（従来型+コミュニケーション活動重視型）

*An Introduction to Advanced Spoken Japanese*. 1987.

*Japanese for You*. 1988.

*Japanese for Everyone*. 1990.

*Communication Japanese Style IV*. 1990.

中級から学ぶテーマ別日本語. 1991.  
日本社会再考. 1991.  
自然な日本語II. 1991.  
*Formal Expressions for Japanese Interaction.* 1991.  
*Office Japanese.* 1991.  
*Situational Functional Japanese.* 1992.  
留学生の12ヶ月. 1993.  
日本語会話中級I, II. 1993.  
*An Integrated Approach to Intermediate Japanese.* 1994.  
日本を話そう. 1994.  
文化中級日本語I. 1994.  
日本語中級J301. 1995.  
日本を考える五つの話題. 1995.  
商談のための日本語. 1996.

C. 個別のコミュニケーション活動を支援するための教科書

ニュースで学ぶ日本語. 1986.  
ロールプレイで学ぶ会話(1). 1987.  
ロールプレイで学ぶ会話(2). 1988.  
プロジェクトワーク. 1988.  
ロールプレイとシュミレーション. 1989.  
日本語の聴解. 1990.  
インタビューで学ぶ日本語. 1991.  
コミュニケーションゲーム. 1992.  
実戦力のつく日本語学習インタビュー編. 1992.  
毎日の聞き取り50日I. 1992.  
日本語 口頭発表と討論の技術. 1995.  
研究発表の方法. 1996.

最後に、上記のBに分類される教材の中で、読解も含み、同時に会話練習も行なえ、なおかつ、全体の構成上扱いやすいものとして、『中級から学ぶテーマ別日本語』『日本語中級J301』の構成について紹介する。

● 『中級から学ぶテーマ別日本語』荒井礼子ほか、研究社

各課の構成は以下のようにになっている。

各課の構成：

「新しい言葉」

「いっしょに考えましょう」

本文

「答えましょう」

「使いましょう」

「まとめましょう」

「話しましょう」

[A]

[B]

「書きましょう」

[A]

[B]

聴解テープ、練習問題

速読用文章、練習問題

「新しい言葉」とは、想定された（『日本語初歩』国際交流基金を終えた学生を想定）未習語彙がリストになり、ルビがふられている。「いっしょに考えましょう」には本文を読む前に、クラス内で確認する質問項目があげられている。それにより、本文のテーマに興味を持たせ、不足語彙を補い、どんなものを読むかという予想をたてさせるものと考えられる。本文はそれほど長くない。長くてもB5で2ページまでである。「答えましょう」は、本文の内容を理解したかどうか確認するための質問である。「使いましょう」は、文型練習であり、完成問題の形式になっている。「まとめましょう」は、本文を要約するために使われるもので、具体的には文章を本文の表現を用いて完成するようになっている。「話しましょう」は、内容についてのディスカッションのための指示が書かれており、[A]においては本文に則した問題が出ており、[B]においては、本文のテーマと関連する問題を一般的にとりあげてディスカッションをするための指示が書かれている。「書きましょう」は、作文のためのものではなく、文型練習の追加であり、口頭により練習しにくい書き言葉用の文型が出てくる、とのことである。また、別教材として、本文の内容に則した聴解テープと速読用文章があり、それぞれに練習問題がついている。

各課の項目を教える際に、どのような手順に則ってするかを示している例があるので、

下に引用する。

「5. このテキストを使った授業の一例

- a. 新出語彙の導入（理解が難しいと思われるものを中心に一練習で扱う言葉は、ここでは扱わない）
- b. 「いっしょに考えましょう」の質問を使いながら、テーマの紹介
- c. 「使いましょう」で扱われる項目の紹介（本文を読むのに困らない程度に）
- d. 本文読解
- e. 「答えましょう」（口頭⇒書かせる）
- f. 「使いましょう」（c. で導入したものを、使えるまで練習）
- g. 聴解 I（テープを一回聞き理解度チェック。その後、書き取り練習）
- h. 「まとめましょう」（口頭⇒書かせる）
- i. 速読
- j. 「話しましょう」[A]
- k. 「書きましょう」
- l. 聴解 II（テープを一回聞き理解度チェック。その後、書き取り練習）
- m. 「話しましょう」[B]
- n. 作文（「話しましょう」で述べた意見を作文にする。学生の力に応じて、関連語彙の導入。例えば、3課では、単身赴任、転勤等）『中級から学ぶテーマ別日本語』p.v

●『日本語中級J301－基礎から中級へー』土岐ほか、スリーエーネットワーク

各課の構成：

「読む前に」

本文

「文章の型」

「Q&A」

「Grammar Note」

「練習」

「ことばのネットワーク」

「書いてみよう」

「話し合ってみよう」

『教師用マニュアル日本語中級J301』 p.6-8

「読む前に」: 写真, グラフ, イラスト等の様々な情報により, 本文のテーマに興味を持たせ, 進出語彙やテーマに関する知識を補い, 読むものに対して用意をさせる. ビジュアルなもので, 学生を議論に導きやすいと思われる.

本文: B5に1ページ以内の短いもの.

「文章の型」: 文章の構成を図式化して理解させるための練習問題.

「Q&A」: 文章理解をチェックするための内容質問と多肢選択問題. 多肢選択問題の形式は, 口頭によるやりとりを簡単にすると思われる.

「Grammar Note」: 本文で扱われている文法項目の文法ノート (『新日本語の基礎 I, II』終了を想定)

「練習」: 文型・表現の練習問題, 転換問題, 完成問題, 選択問題等.

「ことばのネットワーク」: 「練習」「ことば1」「ことば2」からできている. 「練習」において本文に出てくる語彙の練習をする. 「ことば1」は本文に出てきた関連語彙を補足する. 「ことば2」では, 「書いてみましょう」「話し合ってみよう」で使える語彙を導入する.

「書いてみよう」: 段落レベルにはならないが, 箇条書のような長さで, 「ことば2」に出てきた語彙を使って作文する.

「話し合ってみよう」: 本文・「書いてみましょう」に関連したものを話し合うための指示が出ている.

以上、最近の市販の教科書のタイプを紹介し、そのうちの「書きことば」と「話しことば」両方を取り入れようとしている新しいタイプの教科書（従来型+コミュニケーション活動重視型）の二つの例を簡単にまとめた。

#### 4. 最後 に

本報告書においては、既存の中級教科書を分析したものを通して中級教科書像およびその開発手順について概観した。筆者の私見においては、ICUのJLPにおいて目指すものは、「従来型とコミュニケーション重視型の折衷型」の形式のもので、読解教材に話し言葉の要素を含めたものではないかと思われる。中心となる読解教材の開発については、その手順・トピック・文型・語彙・練習に関する留意点を2節および3節に挙げた。

参考文献：

- 河原崎幹夫（1979）「中級日本語教科書について」『日本語教育』37号
- フォード丹羽順子（1996）『『わがこと・ひとごと』の観点からの中級文法教材作成への一試案』『日本語教育論集』第11号 筑波大学留学生センター
- 野田尚史（1986）「日本語教科書における文型の扱い」『日本語教育』59号
- 田中望・斎藤里美（1993）『日本語教育の理論と実際－学習支援システムの開発－』大修館書店
- 大野美穂・大野裕（1993）『『中級から学ぶ日本語』文法ノート作成経過報告』『AKP紀要』
- 大木隆二（1994）「中級教材の扱いとその周辺をめぐって」『九大留学生センター紀要』第6号
- 羽田野洋子（1990）「初級段階から中級段階への移行期の教材」『日本語と日本語教育』第18号 慶應義塾大学国際センター
- 築島史恵・来嶋洋美・楠本はるみ・荘由木子・福谷正子・山崎深雪（1993）「中級読解教材の文末表現」『日本語国際センター紀要』
- 小山揚子・鹿浦佳子・内藤裕子（1997）「中級後期の会話教科書」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』
- 川口義一（1986）「中級教科書の語彙・文型」『講座日本語教育』早稲田大学語学研究所
- 北條淳子（1980）「中級段階における学習内容」『講座日本語教育』早稲田大学語学研究所